

〔資料解題〕『イルティッシュ号と和木』について

諸岡了介

本書『イルティッシュ号と和木』は、1905年（明治38）に起きたイルティッシュ号漂着事件について、地元の江津市和木公民館が資料を収集・編集し、1967年（昭和42）10月に発行した冊子である。盆子原利郎氏が編集・発行の代表となっており、巻頭辞によれば、編集作業には主として江面（原）龍夫氏が当たったとのことである。

イルティッシュ号漂着事件と和木

日露戦争中の1905年（明治38）5月28日、日本海海戦にて砲撃を受けて航行不能となったバルチック艦隊の特務運送船イルティッシュ号が、ようやく島根県江津市和木（当時は那賀郡都濃村和木）の真島沖に到達したときには、もはや沈没寸前の状態であった。不意の見慣れぬ艦船の出現に浜へ集まってきていた地元の和木の人々が、投降の意を示したこのイルティッシュ号の乗組員（本冊子では265名と記述）を救助し、介抱や保護をしたというのがこの事件の経緯である。

この件は、敵味方をこえた博愛の精神を示した美談として、あるいはまた日露戦争や日本海海戦での勝利を象徴する事件として、当時から話題となった。和木地域では、信号旗や照明器、砲弾といったこのときの遺品を保存し、1907年（明治40）に嘉仁親王（後の大正天皇）が山陰行啓に訪れた際には、東郷平八郎を従えてこれらの品を台覧している。また、毎年5月28日には、この事件を記念した「ロシア祭り」を開催することが和木地域の恒例となった。

沈没から半世紀以上を経て、イルティッシュ号が再度、全国的な注目を集めたのは1959年（昭和34）のことである。真島沖に漂着後、翌朝未明には海中に没したイルティッシュ号には、それが金塊を積んでいたとの噂が長年絶えなかった。その引き揚げは容易ではなかったが、1959年北村滋敏なる長崎県の事業家が全国モーターボート競走会連合会長笹川良一の援助のもと、本格的な船体の解体・引き揚げ作業を企てるとこれが世間の耳目を集め、新聞や雑誌といったマスコミの報道戦の様相を呈するにいたった。結局、このときも黄金や財宝が見つかることはなかったが、現在、和木地域コミュニティ交流センター敷地内に建っているイルティッシュ号の碑は、このときに笹川良一が建てたものである（2021年に海岸から移転）。

本書の意義

このイルティッシュ号漂着事件に関して特筆すべきことのひとつは、この事件を記念した「ロシア祭り」が、地元の人々に親しまれた行事として戦後も続けられた点である。この事件は和木の人々にとっては誇るべき先人の歴史であるが、当時の史料が乏しい上、1959年の「金塊騒動」はイルティッシュ号を好奇の対象としてしまうものでもあった。和木公民館にて本書の出版が企画されたのは、こうした状況にあって「正しい歴史」を伝えるべく、「来降以来60余年を経、現存の方々も年々減少し真実を伝える纏まった資料もなく、昔語りになりつゝある当時郷土先輩の示した博愛の精神を永久に伝えたいと願った」からであると、本書巻頭辞に盆子原利郎氏は述べている。

イルティッシュ号漂着事件に関してもっともまとまった記述は『江津市誌』（江津市誌編纂委員会、1982年）の中にあるが、その記述をはじめ、現在にいたるこの事件関連の情報のほとんどは、本書『イルティッシュ号と和木』に依拠しているか、あるいはその孫引きである。しかし、非売品の冊子として出版された本書は、現在では入手および閲覧が困難な状況にある。一般にもっともアクセスしやすい情報としては、1974年に発表され、1984年に文藝春秋から同名の書籍として出版された難波利三氏による直木賞候補作「イルティッシュ号の来た日」がある。ただし、イルティッシュ号に魅入られた少年「弥吉」の半生を描いたこの作品は、本書『イルティッシュ号と和木』を参照してはいるものの、「弥吉」の存在をはじめ、小説として脚色されたものであって史実の理解には適していない。

今回縁あって、和木地域コミュニティ交流センター長の野田久雄氏から本書のコピーを託された筆者（諸岡）が、これを広く利用可能にするべく島根大学学術情報リポジトリにデジタルファイルを登録する次第である。

本書の内容

本書は三章構成となっており、第一章では、当時の新聞記事や乗組員の手記などに拠りながら、日本海海戦やイルティッシュ号の和木漂着の様子が記述されている。第二章ではとくに、史蹟申請や記念碑設立を目指し、1936年（昭和11）に地元で設立された「露艦来降史蹟保存会」周辺の動向が、保存会会長の日記を含む資料を紹介しながら辿られている。第三章は、上述した「金塊騒動」の顛末をまとめたものとなっている。

また、序文には、和木公民館代表の盆子原利郎氏に加え、島根新聞社編集局長の足立重雄氏、江津市教育長の森脇義寛氏が一文を寄せており、1967年（昭和42）当時においてこの事件に対し抱いていた人々の思いをうかがい知ることができる。

【補足】イルティッシュ号の乗組員数について

イルティッシュ号漂着時に投降・救出された乗組員の人数については複数の説があり、正確な数は定かではない。

事態が複雑となっているひとつの理由は、イルティッシュ号が和木に漂着した同日 1905 年(明治 38) 5 月 28 日午後、日本海海戦で撃沈されたウラル号からボートに乗り換えたロシア兵約 20 名(これも 21 名説や 22 名説がある)が美濃郡鎌手村土田(現・益田市土田町)の北浜海岸に上陸しており、翌々 30 日には収容先の浜田・真光寺でイルティッシュ号の乗組員たちと合流していることである(詳細は矢富熊一郎『石見鎌手郷土史』島根郷土史会、1966 年)。

事件直後に公表されている情報は、浜田や松江の警察や軍隊からの電報を掲載した新聞報道であるが、いずれの数字も明瞭ではなく、相互に食いちがっている。『山陰新聞』(1905 年 5 月 31 日付)は 5 月 28 日の電報 3 通を掲載して、和木からは「将校 17 名兵員 235 名負傷兵 32 名」が上陸、土田からは「17~8 名」が上陸、和木・土田上陸分の兵士合わせて「将校水兵合せて 270 名並に負傷者 32 名」と報じている。また同じ紙面で、29 日打電のものは、イルティッシュ乗組員として「将校 18 名(内軍医 1 名)下士卒 225 名(内重傷 15 名軽傷 17 名)」と、土田上陸分として「将校 1 名下士 3 名卒 17 名合計 21 名」と報じている。

『東京朝日新聞』(1905 年 5 月 30 日付)は、和木上陸が 267 名、土田上陸が 21 名と報じているが、翌日には 30 日松江打電情報として和木上陸が「将校 17 名兵卒 225 名負傷者 32 名」で、土田上陸が 17 名としている。

『山陰新聞』(1905 年 6 月 1 日付)の続報には、浜田からの特信として、和木から上陸した「捕虜 228 名」について「将校は連隊長舎宅へ一半は楓川教校一半は真光寺へ収容」とともに、別に「32 名の負傷者」は掬水亭(掬翠亭)へ収容し、「其内重傷 4 名」は広島予備病院浜田分院へ入院させたとある。

現在では、「第五師団長より参謀総長宛」5 月 28 日電報(#532)の文面を『日本外交文書』(外務省編、巖南書店、1960 年)にて確かめることができるが、和木に上陸したのは「兵員 244 負傷者 32 名」とあり、『山陰新聞』『東京朝日新聞』のいずれの記事とも一致しない。

このように断片的な情報が錯綜するなか、もっともまとまった記述があるのは 1913 年(大正 2)刊の『日露戦役ニ於ケル歩兵第二十一聯隊歴史 全』(歩兵第二十一聯隊編、歩兵第二十一聯隊将校集会所)である。以下にその記述を紹介しておくが、これらの記録にしても絶対に正確とは言い切れないことには注意が必要である。

浜田の聯隊に届いた最初の通報は浜田警察署長からのもので、5 月 28 日午後 7 時と午後 9 時にそれぞれ、和木に約 250 名、土田に 22 名のロシア兵が上陸したという内容であった。翌 29 日には現場に派遣された中隊長や大尉が、和木に上陸したのは総員 247 名で「内将校 19 名負傷者 32 名」とあり、土田に上陸したのは「士官 1、下士 3、兵卒 17」とであると報告している。

その後、浜田へ移動した5月30日時点における「収容俘虜」について、掬水亭（掬翠亭）には「将校18名、従卒7名、医官1、傷病者其他35名看病人2名」、真宗教務所には「准士官3名、下士以下97名」、真光寺には「准士官3名、下士以下99名」と記録されており、その階級・役職は「中佐2、大尉4、中尉1、少尉12、医官1、准士官6、下士30、兵卒209、計265」となっている。もし、この265名の内、土田から上陸した元・ウラル号乗組員の数が21名だとすれば、この時点で収容されているイルティッシュ号乗組員は244名ということになる。

ただし、上掲の6月1日付『山陰新聞』に記されていた、広島予備病院浜田分院へ入院したという重症者4名のことや、将校が連隊長舎宅に滞在したことについては、この『日露戦役ニ於ケル歩兵第二十一聯隊歴史 全』には記載されていない。ここに記載されていない事実はほかにもあり、日本各地の戦死者埋葬地を巡った当時の正教会日本大主教ニコライは、2名のロシア兵が浜田の病院で死亡し、浜田陸軍墓地に埋葬されている旨を記録して、ひとりポチカーレフ号の水兵で、もうひとりイルティッシュ号の機関士（イワン・ドラニツィン）であると記している（ビタリー・クザーノフ、鈴木正久編『日本に於けるロシア戦士の墓』1993年）。これらの記録の存在に注目したのは岡崎秀紀・鈴木誠両氏であるが（「日本海海戦で島根県沿岸に漂着したロシア兵とその後」『島根県高等学校教育研究連合会研究紀要』41号、2004年）、これら死亡兵士がどこまで人数にカウントされているのか、ポチカーレフ号の水兵なる者がどういう経緯で浜田に到ったのかなど、依然謎が残されている。

さらに付記をしておけば、この『日露戦役ニ於ケル歩兵第二十一聯隊歴史 全』では、浜田に収容されたロシア兵たちはその後、松山道後ではなく、門司の大里収容所に送られたと記述されている。

(2023年9月筆)